HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	天塩地方演習林の育林事業
Author(s)	上浦, 達哉
Citation	北海道大学演習林試験年報, 1, 48-49
Issue Date	1984-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/72613
Type	departmental bulletin paper
File Information	1982_2-3.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

II－3　天塩地方演習林の育林事業

上　浦　達　哉

1．造　林　事　業

①山火事跡無立木地への造林

本林では，明治末から昭和初期にかけての山火事跡が約6,000haあり，このような無立木地を対象に大正5年より造林事業が開始された。その後昭和54年度より山火事跡地更新の特別予算に基づき，現在では年間50ha前後の造林を実行しており造林地総面積は約1,300haに達している。

現在の造林樹種は蛇紋岩地帯に山火事跡地が集中しているため，気象害にも強く郷土樹種であるアカエゾマツが主な植栽木となっており，部分的に蛇紋岩上でも生長の良いカラマツF_1をおりこみ，土壌条件，気象条件の良い場所ではトドマツ，エゾマツ等も植栽している。

②雪崩常習地への造林

本林では，山火事跡地だけでなく雪崩多発による無立木地への造林も実行している。本林の実施事例では53年度に面積1.52ha，斜度約30度の雪崩常習地を全刈地拵し斜面の上部約¼までに2m×2mの間隔で地上に30cm出して，杭を打ち込み，カラマツF_1，アカエゾマツ，トドマツを植栽した。その後雪崩は完全に止まり植栽木も順調に育っている。

③トドマツ山取り稚苗の利用

植栽後約50年経過したトドマツ人工造林地には，うっ閉し林床のササが消えたあとにトドマツの稚苗が大量に発生する。その苗（苗長2～4cm，m²当り約600本）を腐植層といっしょにジュウタン状にはぎ取り，その日のうちに苗畑まで運搬し，苗床に敷き並べる。移植後春から夏にかけては，ヨシズにより日照を50%程度に調整し，2年間養苗後，床替をする。その後，天然更新植込み用山出苗に利用する予定である。

④間引苗を利用した造林

本林では58年度秋に初めて試みた。施業方法は，現在密植状態となっている林道ぶちのアカエゾマツ植込み場所（掻起し地）から，1m前後の苗木を間引き，造林用苗木として利用するものである。

掘り取りの際には，根の土が落ちたり乾燥しないように，土のう用袋で根をつつみ運搬し，袋から取り出して植込む。仕様は，列間4m×苗間4m，ha当り約600本前後である。植栽地は，ササが薄く高さ50cm前後の場所である。その後は下刈，除伐作業をはぶき，1回の間伐でha当り約400本程度に調整する予定である。

2．天然更新補助作業

①掻起しによる天然下種更新

本林では，47年度より更新不良林分を対象に，レーキドーザーによる掻起し作業を年間10～20ha実行してきた。この掻起し地には天然下種によるいろいろな樹種の発生がみられるが，本林ではカンバ類の更新が最も多く，この大半はウダイカンバである。

本林での1例では，掻起し後ウダイカンバが発生し，11年目で樹高6～7mになっている。こ

の結果では天然林と比べると，かなりの生長年数を短縮していることから，伐期はそれぞれシラカンバで70年，ウダイカンバで100年，ダケカンバでは120年として目標をおいている。

②人工下種

本林では，掻起し地の天然下種更新の不良な場所，また，いろいろな樹種の林分を造成するために人工下種を実行している。施業的にはオニグルミ，ミズナラ，ウダイカンバ，ヤチダモ等を多く実行している。さらに人工下種地での保育作業は，下刈の他に生長の悪い場所では追肥も行なっている。

③植込み

本林では，過去苗畑産の苗木を利用して植込みを実行してきたが，55年度より掻起しによる地拵地に，天然下種更新したいろいろな樹種の山取苗を利用して植込みを行っている。樹種はトドマツ，エゾマツ，ミズナラ，ハリギリ，ウダイカンバ，ダケカンバ，キハダ等である。また人工下種地からの間引苗（ホオノキ）を利用した植込みも行なっている。

植込みの際には，当初ビニール袋を使用していたが，57年度からは条件の悪い場所では，ジフィポットを使用し，条件の良い場所では，ポリポットを使用した植込みを行なっている。ジフィポットは掘り取った苗木といっしょに植込み，ポリポットは苗木を取りだして植込む。これらの使用により，根の土をおとさずに植込めるので，活着率が良くなり，又根の乾燥をふせぐため１週間ぐらいは苗木をストックする事が可能になった。

④ペーパーポットを使用した植込み

本林では，58年度秋に初めて試みた。施業方法は，アカエゾマツの２年生（苗長４～５cm）の稚苗をペーパーポット（ビート等の養苗に使用されている）に移植し，土場跡地等で周囲に母樹がなく，天然下種更新がのぞめないような場所を対象に植込みしている。